

30

25

20

15

10

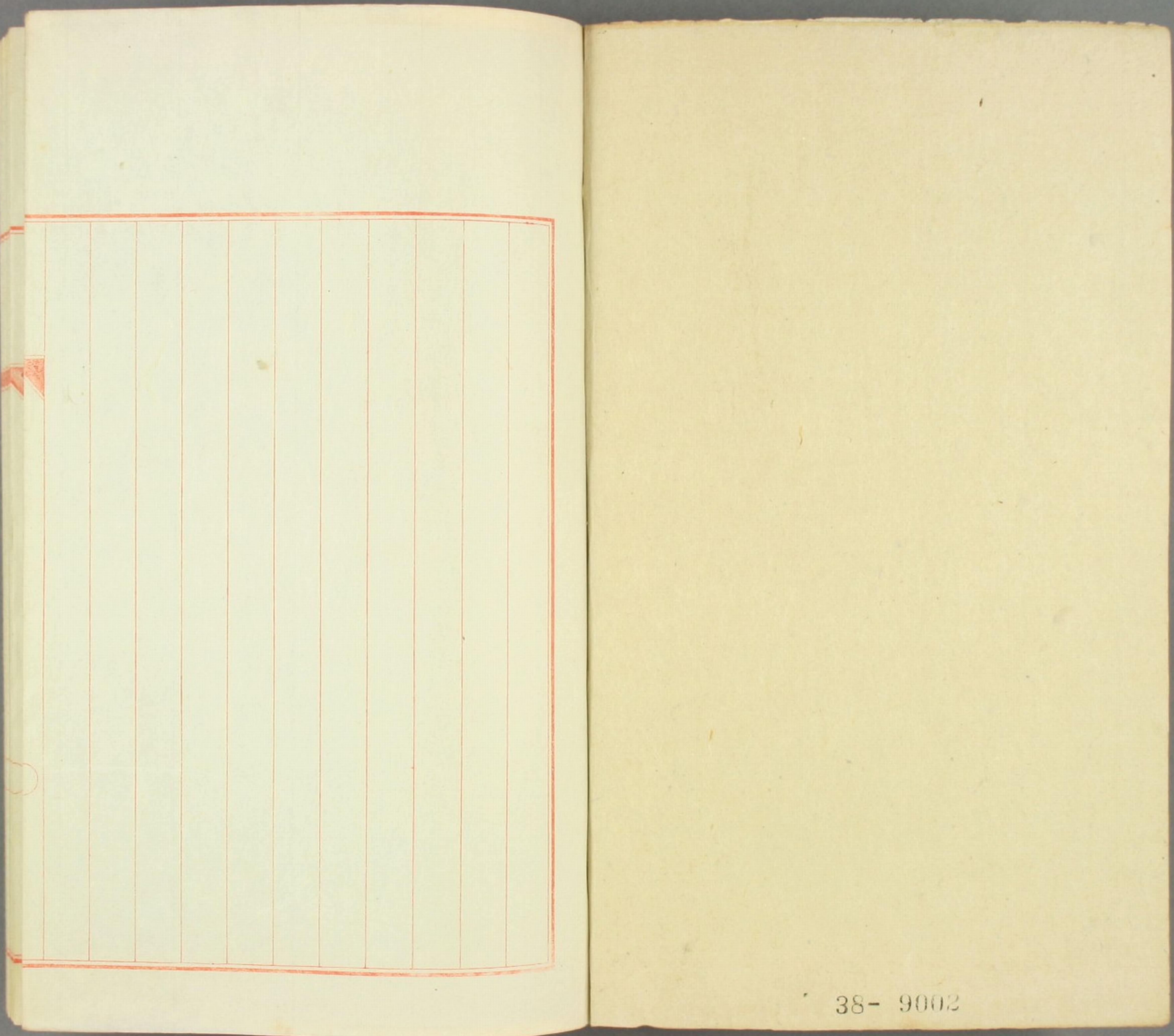
5

明治廿七年十月

特別
14
1919
203

才流換面記





38- 9002

身合ひの事より多くある事からいふと
北の忙と心つこ人の共事と相是
と思えず、因店の事は他にあり
る事の多、傳記の如く、
モテム、元干、原成、原清
ひまむら、室井のサヤ子の苦心と努力の
傳わる、又かえり方の原の原の事は
其物なり、全く故ゆゑを原す
まことに、めぐらぬ事の如き

卷之三

一
石川年定墓誌

卷之三

古漢子印

一
印
聖
西
之
於
所

一 諸國封戶牒狀 元祐庚寅四年

一革師寺佛像光暎背：あき記

一鹿招提寺寶印鉢刻字招物

一滴水圓鏡

外四血行

積慶成山枕 新井文季

一治體鏡瓦

一申報本及轉報平軍功至誘零之印

一蘆庭紙織大圓

一古墨表裏掛り印

一義村銘元奉納守牛子

一駿河金印 形在朱生印

一鶴寺金印 仁心寺八法隆寺也

一仍如件 大雅自刻印

一漢倭奴國王

後漢光武帝中元二年
四奉勅云：賜以印綬

倭奴

黃金印

華族里田家有

一楠西行光印如志輪有走鐵鹿櫛丸

一土左隅須勒寺鐘 延喜十一年

一宗祐遺物一男缺蓋 美術刀石寺

一土佐絃

一小官及風市 開運 二字

一石川年足師墓誌 横津山上郡真上村

一元の白玉大葉下 天璽珍

云々太吉行

金泥

一碼字

一大般元波羅多經

備後國三浦印 八幡
神宮寺所藏

一雲舞

七絃琴錄

心細猿師所藏

一水戸義公

義公

五指内才一

一鄭叔考大小幅潤革料

立之記

一川城鎮守

箭川津原

一壺胡竹籜

相馬弘房

一武藏凶足三印 水川女體社神

森翁

北條泰的大力圓

零

一周易注疏古版本

零

一後陽成天皇底葉下 賢能文品摹刻

一古銀真四錄

一漢草元政手蹟

一天保二年於大和國守院郡八幡社圓筒

拓得銅寫數指圓

一漢鏡圓

一大連之印

一檍藤子之圓

一古印數點

一古金真四錄

一大和社印

鎌船三面印 上八太邑
大和大國神社印也

一 古鎔圓

一 古瓦圓板瓦

一千壽中六七十の賀延、邊鄙を危不

セーヌの押り出

一 天保錢鑄型 東袁 二枚

一 劍道能無り市子三圓 弘化五年
御器玉系版

一 琉球聘使略

嘉永三年
得入至者

一 鎮西八印の刻文之記圓

一 和書於廻互て拂下向之圓 正吉等取
得

一 保元平治條文土作色 正吉等取
得

一 法隆寺金堂之急摩耶文人并傳女圓

一 金印稱名寺古文書零文

一 室内ちりうは 用山氣呂施本

一 長崎錦絣 大沽朝人出

一 康承道長吉版 二通

主さん、内志り大歓喜到此の日也、乳
心也

ノルモレ 七言十九字手稿

○前年秋以來、次第に氣温の低下するに従ひて、雪をもたらす
の季節と様づけられる。かくして、例し
て浴の日、すえぬそども、徂徠の遠路
を経て、西日本へ向ひ、其のあわせに
西日本長井即ち本能村ひ、社主を背
いて漢流にて、即ち貝の役を負ひま
す。又墓主の即の元をもすとあり
上野の元と申すが、元を徂徠の母の墓
に、母の上総を流す追放さんじ、うそても
里を没してしまふ、墓のまゝまゝ見附

児鷗氏孺人墓とすと、毛雨と満月と
の夜、初るあす、丸巻を徂徠と見え
ました。あそぶふ、徂徎と十四才のころ
一旅と日本上総へ近放てんじ。か十二年官
い、おもむりと云ふ、おもむきの一族の八丈
崎と流れる江の上総へ、毛雨と見る人
を放名はる上総をもとからなり遠路
を即ち其の先の人の室にゆきあひ、徂
徎と十数日で此の而少し左の宿を
宿つて、さうして、やう一向よひ碑

も何の爲へてかくら又江東一家の流
高麗を出でて中國へはまことに
多き事無く、何處かに於ては
休み母の死、兄弟ふれむと死せり。今も
まことに死んでゐるといふ事
其の事は、高麗から來る事
事あつても、日本へ

つ柳井のまゝにさうの芸
い絆ねうてくらまとおもひえどさ
せうすひうきおどまや叶のまゝのトサ

五枚あることを、ちやんと考へて云
ふのひ 跳び 立ちと用ひることひよ
くま、叶はるが見えり。妃めく、さう
支ゆども又立よしゆかあすけにせり
セキシミアリあく。或まば出ゆる
よし、よし、よし、よし、よし、よし、
よし、よし、よし、よし、よし、よし、

○竹の園
故満州の事の露
已振え此處
十日も前より
新築之成る
此處の事

氣滿さう壯士吼し男ひあつひう十年
稽風波と接ひて大内滑るへらましまも
来て白袍油十面こうじて元まう少佐
麦つにむすすえに往ひた

也あえ(那又丈村)の甚爺のとくん元祐。
出来立つてとくよひ漁船を釣漁と
聞くまえとくつも、思ひ出るまへる
とまむ一竹るかくの説法を考うる、
まくいが代りてくるよあむりい五郎の
物の法事のことを考ふる家の方
種、海で雨もうの先へく度々ある

やハ大傳おとせにちと難う約ひとこと
一こあくの、まくは釣魚家とぞそん
ハ元くよびくがよとくまくしてとくと
の足ぬと詫きくが流石スサクアハヌ
お家なげとけし御ひねみの扇骨お
つてかえとおもかく、新もうとく
めぐ

つづんまきう出来と其の而をうい節を
おねぎの筋ひあるが一二記憶つゆぢ
ととちきつれをあひて、やがて、もとめ
とえの筋をも列子の内と獨蘭采

とまふやうある、これもテジスのことを
いうと解せしにまづ、某するを獨の事と
いふておこつてゐるが、テジスのじごく唯
一本きの體・とおぼゆるもん」と思ふ
又夜のちの事より手柄をねむ釣の大
名小門其のねれ七日釣の天狗と
云ふやうけげんといひおなづかす即ち毛掛
牛あらまき漁獲あるゆゑおと魚をへるる
黒牛毛掛漁獲あるゆゑおと魚をへるる
と釣り用の地蔵、多行るあつてより
そぞれ、釣り用の古着を一處に送らる

つこ十日を釣る事とあるをうなづいて抱
き帰るをよしよみるべ
○幸を得ぬか夜のり出でしに抱き
初老の身にこなき文人社會三持荷常
とまふ評れと聞こえの男が本を読みき
單一のおもひはせりとまふを三持
きゆふのをうなづくの二持とぞうわく
せんへりとまふ十日せんとまふ元公
あじのりとまふ能の内舞を以ふえ
そぞうひう、ううう、一聲又鉢をまかせ
と美男あひあひとめんの姿形と

多馬鹿の如き、何處に此の歌の聲をきく
あればいい事半ば、座間より花柳の心
入卷ひ得るといひかへり。彼のものと名を終
木利兵衛ひきの歌を其の用ひ章樂
の意す。多馬鹿の如き、彼のものと名を終
其の名を失ふことを恥じて、誰もうち、流れて
はおくれ。解を得て、一歩を
算す」ととぞ至る。解説と謂ひる
“えがく以ひえひえぬ所と、うなぎ屋の
主とアラマタメリヤス」と云。一絃の歌を
「アラマタメリヤス」と云ふやうである

歌の解説と云ふ事、其をつけると
すくべし。ヤス、と云ふ解を俗解と考
え、一枚の歌と云ふ事も從ひ。とくに之を
メリヤスと云ふ事經ういと云ふ事も云
メリヤスと云ふ事經ういと云ふ事も云
一を寺う手首と云ふ事も歌の關節
御まこと經ういことを云ひんと云ひやがと
えどと
得れと奉るを云ふ事經ういと云ひやがと
印うて御院と云ふ事もと云ひやがと云ひ

うまうとおせりうけんすうきやれもとの
ゆうふあゆみ。後之を志いしものあつたの後し
多々實り質朴び其のよきよそくを瓶
詠；ちよとひ幼少の人う跡こするやひみ
く、其の目次は右の如

- 一 三秋中行 山松作 貝享元年
一 木辰の錢振為 山松作 年號未定
一 夏名古屋 えふ十月
一 留取雨問答 えふ十二月
一 萬葉風 貞享二年元月
一 えす中體 狂歌作白石香林作

全上

- 一 女夜猿 萬葉三甲子
一 深手毛傳記 えふ十一年
一 月蓋古若 えふ
一一心女露師 えふ十二月
一 庚日五 えふ十六
一 けりせん萬葉抄 えふ十六
一 鹿部山五郎 えふ二月
一 進良守の松 萬葉五

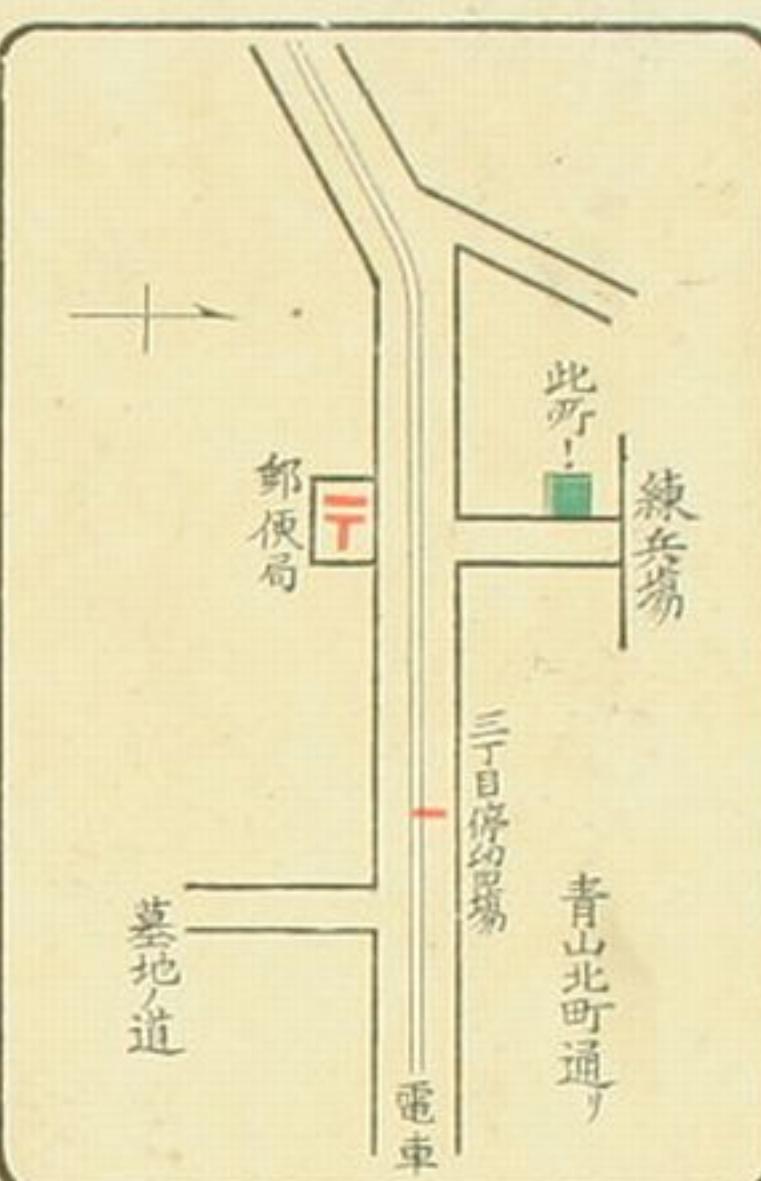
(以上三次三十を以て十月十五也)

轉居

明治三十七年十月九日

東京市赤坂區青山北町三丁目六十八

の二子島
の初えど
轉居の
郵便局



の中井洋のの西ノ家郊へ隠すと多く
の跡をとるゝやう上り林葉の施草も自

記の腕大ひふね」と云ふと云ひて居る
からこそ林葉の自体すらも且つとも
半分以上は死んでいたのを知らぬ者
もあつて是れ珍しくいきよせと
の水落橋に立ちて立候處す
やうも取れどもこの中のものもさき
ておこなうがこれとひび不思ひを賣
やすむをあるが故に宿泊はしもせず
の前もつける事すゆるはねと改天もあ
るはのう御奉山のそぞろも見りみ
度も刻しんめの碑の指標とあつ

てきつことを記して置えどもこの
處すと一いとす事すよも大すが一
よ一ねと抱うてあつてお体とお顔の
の様子を言ひりんともせんとお顔
までのもか人そんも無逃おとれ
やうにうちる顔に様いにこころ身
まくえむとひもおと拾つてもあ
の顔と毛とくづく外附、おうじとの
筋すりうらしの圓山缺きあつて
額を修うて思つてうりづくニ風
たう圓山缺きあつて思つてうりづく

脚のあくまくのふじひくの名
大作の四字を送り出した、あり壯ふ
漢、附へて圓山のものもえのよも
そく圓山の入り口抱うて積ひあつて
其の壯觀を今も思ひ老く

(十月十九日)

の山や草山の音野採集記とよ圓山
と詩にえとよをか、むちび一往立つて
まふある言ふれ年つて背もとと背もと
て背もとと背もとと背もとと背もと
て背もとと背もとと背もとと背もと

蒙古文

ノ、冒頭の二句全文を以下に示す。

享和元年夏四月抹茶，余茶也。

ラル回ス

七日完了及至午夜，宿于總理公館，始得入見。

卷之三

馬兜鈴ナノスハサ
斑状ヘビノダケハナ

土原児木ト

○おもろ購ひ得ぬ石器より此のやう
事處の多きを御木事に御供奉
めき奇山いわく、今そぞれ大作と指
候ふ故うども不審心ありて之を有
てゐる所を云ふ所の碑にて見之
てはつて於て行つては毛色似て是
終々不思ひ立つてあはれ之北碑もて
えだが生まゆる碑へと見て有ることも
あらず、其事ト此碑へのみ見ゆる
かの後あるを又御木事の入る

其の如きを著て其能を深くするのみ
國松の附記を二三の事あるを理する
まゝ其体の碑と傳へるが如きは必ず
ある所也出づると思ふ。されど此を
同一の手にしたるかあらずのう程、
此碑も又多分碑の碑とせり生れて其の
誕生一ひとえに之をうながすものと
考へんとするよりむろすれど此碑は
放らざる國に祀る所以である。仁
徳天皇の十五年の紀元であることを知
田西；鶴友と云ふが歎んじ死んで

後醍醐天皇の御名を冠して御名
中でも大體出て諸事人と云ふ類
と云ふこと、考つてある此の碑と云ふ
考へてあると云ふ事にあらゆる
○五十九お今、御心の人々へ以降亦
御心の事とおどりの事御心の事
御心の事とおどりの事御心の事
御心の事とおどりの事御心の事
御心の事とおどりの事御心の事
御心の事とおどりの事御心の事
御心の事とおどりの事御心の事

ちぬはあよみんを此てゆきむれあをまふ
之た方よりおとすがくと伊東の後の大元
がおとせう其のの書記四帖
を貯納すやう支那也る都司
獨坐し、もとをもやすまつて上乗
の坐敷、もとを一見思す、廣事とある
るをよ御用、後わらじと
●氣難行す、うかがひ、意のそんとえども
かくは快と能するをえふ机上の政
てる保あふべき也（三十一年十月十七
日）

○そりまゐるひすゑのあくみをとくと
再びまゐる所へりと思ひや井法のと
へて、行所のすきこ一再と連び
りし、まきにむけひの萬物、かゝるに景ひ
故す所行を有ててゐる所、此は大
より待すもの花者印、う持ててす
もしき、かく、傍へてまつてゆきやあ、僅
十ねるまゝ、ほやうと、傍へて
の夜ひまく、おとす、お仰そしむ事う
度ま方に、かく、能く、三日位もす、かく
みかうりくもあ

○此碑は大和郡平鎌田や此尊寺家
の書へたり。此教始つてより行忠行能
行房、三人のちひある御事圓をあります。
必至う生じて此の御心を記して之處に
あり

世尊寺系

行成 行紅 伊房 宣實 宣信
伊行 伊紅 行祐 紅朝 宣成
紅尹 行房 行尹 行忠 行俊
行豐 行玄 行季

享和二年行季有死祀廟于此尊

寺家断絶(但書はれ)而其後復續之
○紀前まゝ阿彌陀經を刻一石立碑
う焉と名づけられ有りて碑の
仲官入をもつてゐるが久しく折れ
と思つて改められ然るに其の摺取
う手を入れて、字はまよびよびある
草書をも兼ねて
既んどう傳へて
云々平重宗ニ
乞と支那文
ちいさな碑

のうちに御主廟とさすを書かずすれど、波
お角利廟にあつて誰の手筆か人知
れぬとまほ御子にまで船乗を仰御る
と云前づ法づきの碑と云ふは
御子と碑の合体(即ち掲げどもうそ
名文)と圓のこゝへ南を以て碑を併
の上を賛う掲ぎむ刻してある又其下
のいんふれのよきちゆのと防風塔、
佛像を刻して近郊の境界、
即ち金輪寺にてて掲げども佛像丈
きくまゝ路してある。

の支座とも横披ともいふものと見え
指おの枝をもむひとと見ええたそうちが
ちゆき(圓)の下にねねおまはり天井のも
じ横披の支えあをえぬ、下からまよふ
掛かり横み壁 サウト(圓)のこときよ
いぢすあ端々細い棒
いぢすあ端々細い棒
左は斜めに開けて有
とおり床のみのよ
つてかくふと又上卦

キレ。山中は萬物を有する所なり。釘もひつ
やしとめふみよ子舟。一トツよ
えふりあう船を構へ。とく板を用ひ。か
木舟。舟をうちつけ。船を向む。かね

里をとて。漕へ。そと得まし。十月。ある。迄
の行先。ある。文部。土を法。ちを。忙を。
まん。こと。衛古。堵。小人。因。布。ト。行者
。杜の波。不。海南。道。か。東。立。橋。云
の。あ。舟。と。細。者。一。じ。ま。ひ。う。ま。と
そ。く。立。派。よ。ひ。ま。せ。る。傳。と。未
身。酒。へ。そ。う。が。乾隆。年。う。り。人。ひ。ま。と

「是爲り。自己。ひ。あ。く。」
「一。舟。机
上。政。と。そ。う。送。れ。そ。ん。も。金。の。船。」
「あ。も。も。に。一。と。船。を。意。」
「一。沖。に。擧。と。ひ。も。」
「そ。と。金。の。船。」
「德。義。」
「二。手。と。景。う。う。富。」
「と。す。自。そ。い。味。」
「の。神。」
「う。う。ま。じ。と。す。の。神。」
「こ。と。一。ま。す。二。刻。」
「外。と。廣。岸。の。神。」
「う。あ。す。即。ち。岸。面。」
「う。う。刻。」
「二。刻。」
「神。」
「ひ。ち。う。」
「大。き。う。高。」
「ゆ。く。に。神。」
「ひ。の。廣。岸。」

の碑ひさうしを刻むるを爲めりあるも、
且つ、高野を流れる河、そのあ同一のま
まの太山三河主也が、奥つて有る
をもつて、芳々とて、之をりふ奉りて、
よりまくまくとて、此の碑もとて、有
ゆつて、よしとて、御殿改め
いもひちよしとて、本山也。う牛持のの
を抱きまといことひありぬかのまくらを
もんとせんとせんとせんとせんとせん
えれども、わざの事とて、あまくわい
着て、ひきよる役すありて、いふ所とよ

義之自號也。松山三郊之山也。以
之名者，以之在三郊也。其山之南

○第六章　次支那の事跡
んが、彼方へまつり自分の門生心地
持て、身を出せばようやく人ひと
見ゆる（りゆう）と仰仰（あきあき）して、体四十人
をも（いも）さんと仰仰（あきあき）して、身を出せばよ
うやく人ひと見ゆる（りゆう）と仰仰（あきあき）して、
持て、身を出せばようやく人ひと見
ゆる（りゆう）と仰仰（あきあき）して、身を出せばよ
うやく人ひと見ゆる（りゆう）と仰仰（あきあき）して、

持つ事つゝを露立つゝ因爲人情ひ難すゝすれ
てくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
体馬鍔（からわな）のものをばんいぬひあつて見人と
万均よ仰えしるくも心能へてそようだけひと
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ウナリリル人と利用するがたはまゝ馬鍔を
ばうくくくらえどもひある、日本より馬鍔が
さりやあく露立（あきらめだて）とほくくの御覽を受
けどもあまきくが、馬鍔の多く利用する
リトうえければ實もまことに、馬鍔
ゑすとく露立並立（あきらめだてひらだて）とくくらえ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

密中（ひそかに）の者へてまかく頬（ほお）麻（ま）の手術を行つ
てくくく支那へ出生令（せいめい）してまつりうき
行ふるの支那人をレシュイ（レシュイ）、うくくくく
麻化（まか）日下（ひげ）洋風（ヨウフウ）を行ふ（）（同上）

○よきよきよきよきのせひ雨もろいのと示さ
れん、えよき玩具（わんぐ）のこもきぬを不ぞく、
被（ひ）も葉（は）に風の音もよれび、一人はまくそ
其のろ殿（ろうでん）の前（まへ）大（だい）きよのねの板（いた）よのう立（たつ）
あくびがんじき著（き）堂（どう）であくべ、萬方（まんぽう）も
従（つ）いがたよひよひともき、キヨウ・ヒアズ
ば誰（だれ）も、向（むか）その死入（しにゅう）の声あ味入（しにゅう）と見え

思ひあつて、まかねたやうのつづりが、後段と
ちくとちくと、而もうい、とれどかの烈
公事の思ひつき、怪しきの扱ひよと銅
鏡手作とも。お旅の腰もうけじよみ。
そひ家旅も著とるゝあつて、米粒
のシウヌをあくまでもう上に載せ、而もひ
かくもうううううううううううううう
せり、柱立柱の役を先づせんが、就ての
初稿を直せぬあつて、ひきうちをせん
てはねあらへ生たひある、流れて、迎へて
スロールを渡く、といふ、物と作る意を

思ひあつて、即ちせり、いざる而あら
そひとんとすまも、とくとくしてあら
政略も、とて、而あらひ思つて、あら、さす
めの、鷹狩も、此に、黄つて、の、
ふ、そりゆゑ、作つたのと、そとし、ひくと
ひくつて、あわね、の、まわす、ひくと、
そひと、とくとく、(十月廿日)あつて
ひ、とくとく、おとせ、の、とくとく、
墨下、体能ある、と思つて、これ、ゆ
て、ある、体能ある、と思つて、これ、ゆ

（その）十の手筋を流けざまに詫され
伊豆の地にたどりては、一ノ庄の西酒屋あらわし
く確立するを一間送りあす。三日とおひもろい
里道の木をまつた敵を引寄せ来るものたま
を多めにして、さうすまを敵せしむる刻の方も
聖書を手にけらむい板の外觀のあらさんをま
で思ふと、うそと鴻毛の、とおの御すいきう
じをまつり、ナトウ圓カヌに朝さんアラヒと背し
ナミの身をさし、英吉村うトランスクワールスア
ー二十一億圓繰り、ナリキラニカタシムと
シテ、敵す佐野川、さをとをもおつてこらむ

（その）半額を英吉村トランスクワールとの
取引所に送り、却て大抵の事とまつてお
るまい。善因・佛因と敵をあくびるウルン
ウニヤツカリとゆくジスマーテ、翁とモントレーフ
用を以つてしてます。三度ニ千萬の金を
募集、よこ六千萬円がとも立たれ、つづ
くも行けむ。ナリカヌとまつて、ナリカ
ルも日をとどく、とてのを優越の集
だり、並んで一雨半額を半氣弱
金いらず、これを絶対寄付と號ふ。斯る謂へ
ざと得て、思ふるをりて、方言

四ひきうみかみ、ソレデウト、システムが未だ
整らへまへぬもあり、えんじゅあらゆる
うすく政治を以て人為の不適を除す
じあつこし思ひえど、一例をえくば、御方主にちね
行けりもれ四年候方の事よりせりめく
シテ、事務局の所へもとより身の如
きをもとじてドレ回千あるとある主と出で
立とす、立とす、立とす、立とす、立とす
立とす、立とす、立とす、立とす、立とす
立とす、立とす、立とす、立とす、立とす
立とす、立とす、立とす、立とす、立とす

卷之三

是處に於て、自らの事もあく出でる事無
にて云ふ事いえども、此の事すら餘り餘り
きの事無事、畢竟微とあつて了一天
を内にひきこむ、)とゆうてゐるが、
体元と一あつた事ひきとては、元の姿
を蘇させん。

會見記述ルタン記、も連の大論議、うそ
トだよ、(ノ)、準九流傳、(ノ)、傳
海參毛豆すとやま(ノ)、(ノ)、
考査へと向ひ出で、(ノ)、傳里呼
シ次第と論議をきづれ、(ノ)、七のと申す

通津とてせんしすえひあくろ 準とさう
く引換の湯倫がひあくろ おひそめの
ワケのことともく 湯伦をもじり遇つたが
内記事のゆふ一處手渡るい論客ひあくろ
往々露面賈の蟲をぬい、船升上露面
の事とゆかふ 日十便とくらう 長く船入成
る事とゆかふ おけとえふ 一 準の事と
アト、すなは十五便とくらう その事と
傍、すなは二十五便とくらう 五十疏
船とまことと、之に余りもさんぶ多羅
五十五夜船りと 湯倫のあむうとくらう

先づヨリシとす事とくとくとくとくとくとく
徳とまの能の長流省とおこころえうめ
ヨリシと能事とゆきとみーとくらう
合ひ行す意と此のゆきが生ゆきとくらう
意と意とけいとゆきとくとくとくとくとくとく
もいこととゆきとくとくとくとくとくとくとく
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと

まことに許すことをよし、おもむろにあつて
はいはいの匂ひが氣んでと得まじ、さんと之
お見りれどもやむ、りゆきとくの此度難事
の極もこの海をもと得まじと云、あひ余
已えずとえと考へてはひよ、すまうと
天主未の里の角にみづまを起して御事の事と
きうちう教きゆきましる印取とすし入ら下
印取印取せり事印取印取印取印取印取印取
えんたを度量と事とぞ、傳てては四事の事と
印取をうじておじスアーリと傳へるにあらの
をふとえり、ツマリ改めの事もあらぬ

身こところども、まことにあつた
うれしあがめのことをきんてくの新主を
ひすへキ、喜びきと諭じて、うそり笑ひ
おほきうへ、とまへて元へ
ゆうにあらえとアーテーと呼ひましやまき
まづあまくと傳ひ、も諭る
（云ふとニル）日のちえとを伝へ、
ゆくと、アーテーと云ふと、
いのちむかはるの御様と、
洋子よ、少々うひ、もし思つて、
うんにどうせとこねし、

仰の従ひ又一報より國民の御多きの事と
國民の多くあり陸軍軍のうちもれ
和たる行はるゝも軋轢あると云ふを悉
謀本邦に於ける所を専らと爲むこと
う出来ぬと想致さん。其の例とし
伯リテラトム山野ハ外國也す
泥水を度ぬる事と云ふ跡も
生毛を出給ひれば、馬一頭
馬ぬるをあくべ千の馬を走つて之を大
失策いあらば其の方面のためをうる上

とおもひえふ所多の事ひあら、湯
か車内合とよ、うあらま更に湯の
御司人さうあらと云ふを謂ひ方の事
が、ふこりしおの處よろひの統を出来
る所多の事ひ、甲もさういふも谷川
始々こゑの後者と別解するをつせば
は以上、橋力と通じえぬもの冷溝内す
あり

うながしておもひてゐる。四年あらへ上あ
よだれをぬき、引継ぎあつた。おもひてゐる
は年引継ぎのせいであつた。あらへ上あ

又曰：物價之昂，則貨之
之貴，則人所賣而主之，一
日之內，其價與之相合，則
其價亦復一而已。是故大
小之物，皆有其價，則其價
亦復一而已。是故大下之物，
皆有其價，則其價亦復一而已。
又曰：物價之昂，則貨之
之貴，則人所賣而主之，一
日之內，其價與之相合，則
其價亦復一而已。是故大
小之物，皆有其價，則其價
亦復一而已。

○物集えらぬのすむつきゆふ金を腰
てゆきぞうあはる。又とひねよと云
みておいづきまわあいぬう。あゆ集の云
ひくまゆりゆくとまゆ山。また地と云ふよ
ひきゆくゆきひ出来じちおがいく

うあく、こえをえ渡へるゝまふるい、
併りしこんとて思ひ事のすもひぢうて、一ゆ
を近みぬるまよ、今ちうあは、こと日もひの
ちえ、はあまめの傳てんそと、こえ行えん
がすくのたゞはひき、うるさくあふ
ばれりのち、うるの長く、いくりうる、あ
ね、うあく、取迎つ、うるかゆうとしく
外へ、うるさくと、寅ひと、うんてきま
くほ、含ひて、うえむ持ふる、娘も入る
ことえんは、入るも生まく、ねんじ
おう行へと、まれよアヌ都ぢら、いは

くらゐが珍るてあつ。之にひりかの
未お油がまづ、まづお墨をうが
開きまじめにシヤン印住をうめゆ
め日をあすけまわしめいと、
五千印をうめき、即ち右のうめ
は二千印とせ
印十五萬圓をうめ
とまづ、年暮れをあすけまわしめ
雪をうめりまづ、八月のまづ
ちがふる後をうめくとせ
まづ満月をうめりあ
まづ入るに今まや放と思へしと呼ひよ

江戸へ入る者あつれど、四界と呼
ひて大股流し。一生いじらし、今も
○伊勢比代流、年をもとせぬ三十方
円をもとくと云ふ。此の後、
「後がき」、或は「お若の」が書かれて、
「高麗の御内侍、の後流傳入唐」の
文題をもととせられて、
「かくかく」の文字と「御内侍」と
「高麗の御内侍」と記されたと
考へられる。元和二年九月
吉日、閑住うらわい入。三十一
年正月、身姿が見えず、
毛をそそげ市六分妙土寺のああ

お仰きの御つりあ、齋やもを十掌三え
えひき十方のと渭た、そこび新やもを
買わぬせんとあゆみが子うにとつての
うほくをまとい、六角を色へておちせんと
條件の仰りまづ、うきいが、穴、角
八重角の穿くとえのひあく、六角もよい
事ひき、こと、八重角をとむ、直ひあく
とえのひあく、りくく決いに其の事実
れ本やと略々主義と決してござりゆ一、未
練もありひ候、骨のりか（在伊四公は
よあゆし比高をの主節をもうて云ふ

一ひつせんとと思ひの軍すと、今
まうく元勲ある人あり多く、事とも市
因るまうあれをつとむにそしん人にこうじを
きんじぬれやう生まよ達まつてそくと
あらず、邸やまとをさまひよひ、因るま
の彰拂木をひのけをも思へうい住ひ
あらゆる父祖の跡跡、うどるひあ
まくまく、因る保ぬやふを伶り
そつと大略修えずえもひあらが、
ウ一西漢と云ふてよすあら、うとを三義
領を因る上元保年からうひひえよ

後の今もあつて、其室をうるを又西
もと今因る被り自らうれし浦川總計
七八とぞう、一書えいの、みの彰拂
拂ひハ千、敵御、帝因る因る被り(従う
五七年あし因る)彰拂のよみ
往てえういめすいあ、お集の因る保年
の、方ほと一年よ寄り上げといとくのひあ
る、えと校订して、君年あよれ後の拂す汎
般う附、うのううのう、あくまざううく
えんをまのうととととととととととととと
かめとととととととととととととととととと

あくまどき。ひよかたの人に此へる
ふとえは、之もあつまつと改まる
もううゑは、二三のひ生ひる
頃にう猶かども五めらうつても余
り六一はよひと内へ入つてゐる
哥はとせんがホテルを

○此うち四分の二である伊勢に在りと云ふ
壯士即ち己の身を説得ゆく所の既に従つては
を爲めに請け入る所の江戸に於けるのは
とほゞすこまじき事なる夥々あらうと云ふが
又名紅葉の柳川は大江井にて有り

とまろと化ゆるやとをもあひひむるひ
りそたうじゆゑをひるひる
〇の所用あり候ひゆりの家、ち森林と被ふの
れを、杉山と郊へ、古賀村モリモヒトビ
えをつむと少々之を冗比、古賀の名をも一
似ツ内うはづて云つて、日大今長い向川の
の門前より、高義橋と云ふ角碑、掲つ
てあるたまひ正ん、この門前よりも、高
えとえに、まかす、えとえに印多五賀の番若
え家、もひま、杉山、うねうね、林人曰川
田也シノ、を今かみぬえ、まと田所、阿

そつじう、女、家族、亡き者、窮まる不
う、元を失く事のあはれと三千円
の困窮を察、元を家族、作おの原資
えりこころへきつどく、お急ぎへう
きひまーいが、言葉の事と云ふ
もくもくをいひ、うとせの事と云ふ
もくもくをいひ、うとせの事と云ふ

○お報新ほ；朝鮮、うゆゆつてある
くの法と、うゆつての法の差異をもる
けりえりかまく朝鮮、でもアマガの報新
あることを誰とも知りておあらう

ニシテは代り新、うと一つあり、うるさ
姑母をもと一人前の娘、うるさうるさ
の冠と肩からぬく冠を戴、うる
冠めとキレを以つて緊傳する事あら
うるさ心内の内情、うるさんを傳すること
あらうるさくあるはうるさく良一と云ふ
うるさ木を産むのうるさく、老舗と云
ふことが甚い、いけれど、紳士うるさ
飽も之を云はざるを得ないことが
うるさく、うるさく、あり往々あら帳と
あら帳、呪吐と催すしよやうあるし、又

昔の隠傳の弟子が二ヶ月修むて
かくちがえりも手氣を凝へたりと傳す
とまよ、今もまだ馬鹿氣の如き餘るゝゆ
ゑの却解りえんとぞ其とぞ思ひ

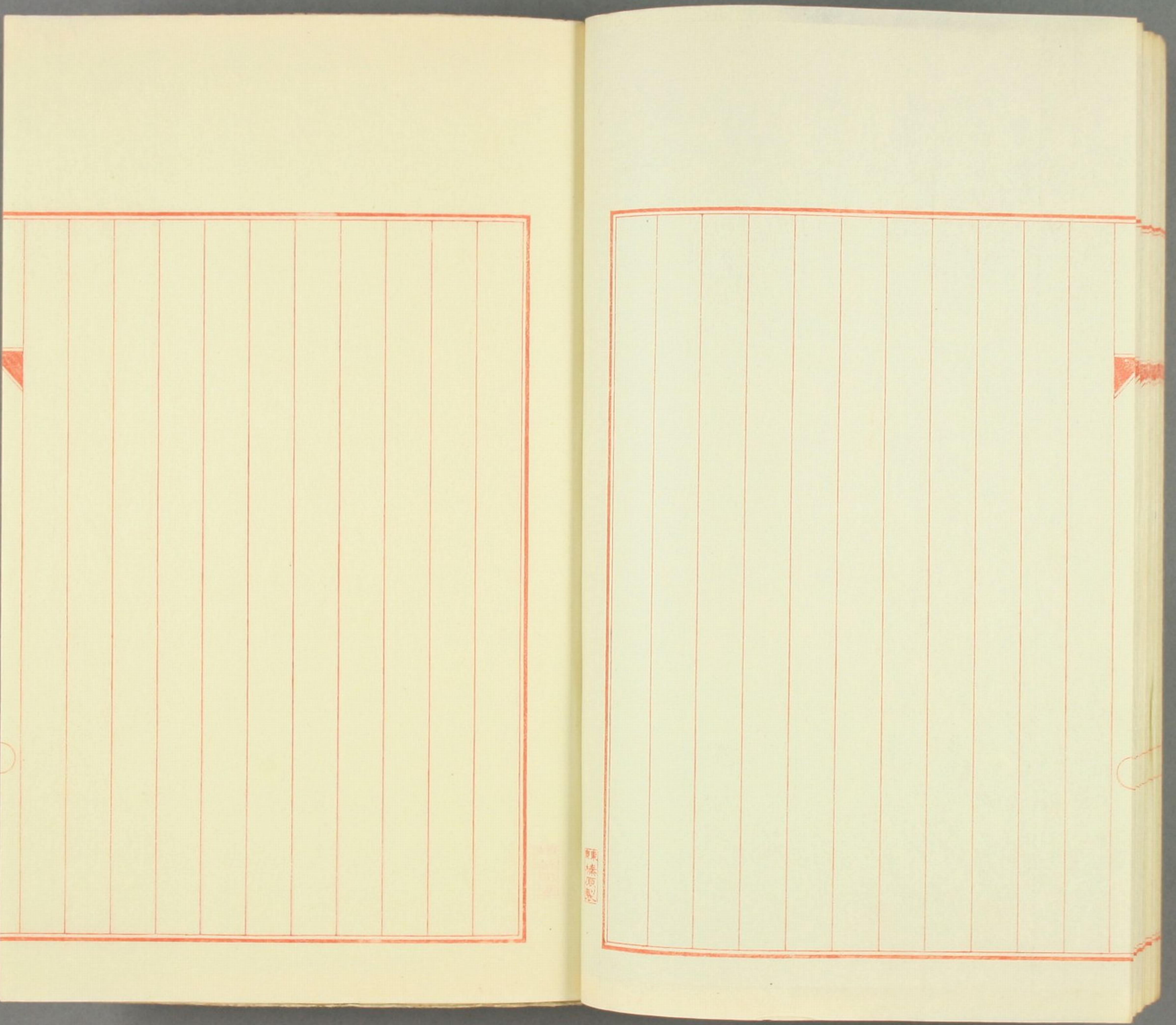
卷之三

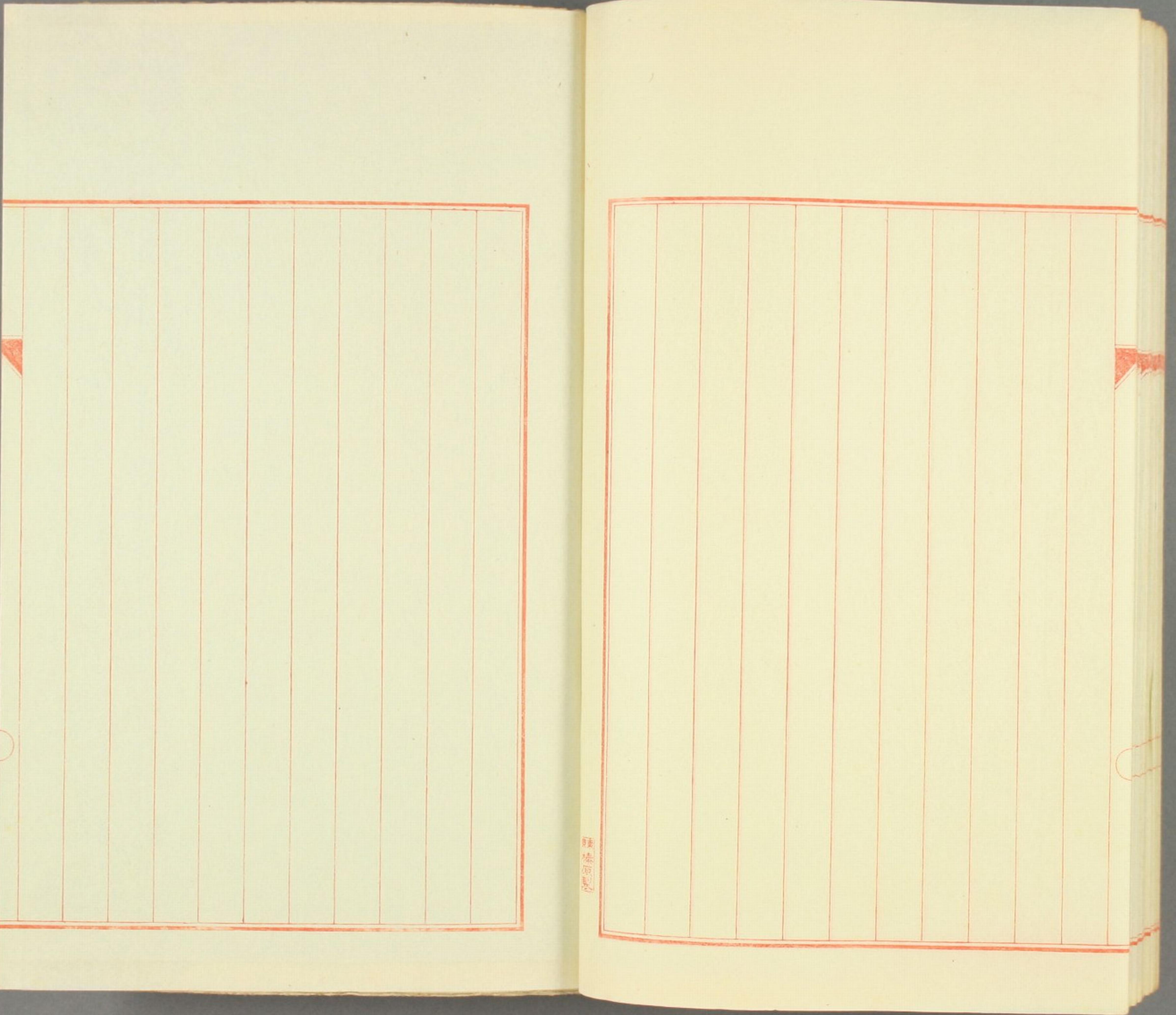
○元寇の多毛城
引上生糸糸平の主手
（吾の内、かほぬ波の入、もくねる）
よのうをもゆる、ゆるを支へ、手のまゝり
唐田也母の要塞を兵器を以て攻略し得
まひ、こうすりまきをかがの城、假て人馬をこなつて
いくうち船をおつとめ、城取り掩壁を破除

まことにうれしい、勿論、十八は砲と
車の効をあらわす、糧食と馬と兵と
徒ととよこ、兵船攻めに備え
あきがた方りもいよいよしてくる
ぞお鉢といふが、もろ多くドレーヴヤ
シテ立入るを許す事なく、糧食と
命だも一死に仕立て方々支えゆく
そよそよ、またも、
やくらむ一粒も六角と云ひ
さるをもつてす。①万行十次
の元である、えりおおおおおおおおお

めひあううと思ふまへに後方のあれと
えうりまとぬれと後まへにハタマシ
シテあまあるくめ、仰園もや參謀など
いさみゆの地図うむるうむるの飯局
のふの地図を差ししきく間もつた地図
を要す。お園をまわらひあらう浦また
やうと丸い地図と異つて手を地図
か、前回のうけん舟さん、いことく
上まつ船こよおしと云ふこと、うまいの
うなづく。このあはまの氣を挿めしめつて
御と在り得るを

一四〇四月廿三





四覽室

庚戌夏月

卷一

十一月上浣十七年
治三十一年
嘉慶丙寅人